

戯曲

諸井 條次

萩市
(1911～1994)



【著作】
『諸井條次一幕物集』（昭和29・劇生活社）
戯曲『冬の旅』（昭和28・劇生活社）
『萩の乱と長州士族の維新』（平成11・同成社）
ほか

諸井條次は明治四十四年（一九一一）、東京本郷の生まれで、本籍は埼玉県本庄市である。本庄には日本経団連・経済同友会を創設した諸井一族の拠点がある。でも彼は、生涯自分の生いたちについて語ることはなかった。父の諸井六郎は著名な外交官で、母も同行したため、彼は両親と過ごす機会がなかった。三歳の時、母が事故で死亡し、母方の清水谷家（四国八幡浜）で育てられる。十二歳で東京の自宅に戻るが、開成中学校三年の時、肺結核で退学。以後病氣療養中に多くの新劇の舞台に触れ、また、一族が経営する事業で働く底辺の人々の暮らしに深い関心を寄せる。それは彼の思想形成に大きな影響を与えていった。

昭和十五年（一九四〇）には、唯一の庇護者である父六郎が死去。同年二十九歳で八王子の高射砲隊に徴兵され、星一つの万年二等兵として終戦まで六年間拘束されることになる。復員後実家には戻らず、母方の叔父を頼って萩に定住する。明治維新史や政治研究に活動する彼は、萩保健所に派遣された若き女医真子堯子さんと、研究会で運命的な出会いをし結婚に至る。夫人は「不思議な動物と出遭った」とその強い印象を語っている。彼の研究費や生活費はすべて夫人の支えに依っている。

昭和二十二年（一九四七）に「ジープの来る日」一幕物を書き上げた後、次々に作品を発表し、全国の演劇関係者から強い関心を持たれる。当時中央演劇学校を卒業し山口で学生演劇連盟を組織して活動していた演出家日笠山慶尚と出会い、共に山口演劇研究所を設立し、更に「劇団はぐるま座」を組織する。毎年のように作品を発表していく中、山口県教員組合からの依頼で児童劇の普及活動を開始した。グリムやアンデルセンの作品から脚色した諸井作品は全県に大きな感銘を与え、福岡県、佐賀県等にも拡がり、「千鳥太鼓」三幕六場は、六百十四回の上演が記録されている。広島 の被爆児童佐々木貞子とそれを支えるクラス児童の活動を描いた映画「千羽鶴」は、全国の児童たちの共感を得た。また、大人の演劇としても、秩父困民党蜂起を描いた「野火」が全国百五十四回の公演実績を持つ。

昭和三十六年、日本作家団の一員として訪中し、その「訪中散記」を『長周新聞』に連載。「はぐるま座」は文革で揺れる中国の要請に応じて「野火」を巡演するが、その内容の改変をめぐって諸井と対立し、関係が断絶する。昭和五十一年再び訪中し、『中国演劇・文革以後』を発行。昭和五十四年には日笠氏とともにNPO日中演劇交流話劇人社を東京に設立する。

晩年は、歴史書『萩の乱と長州士族の維新』に心血を注ぐ。また、過去の作品や資料を手製の紙袋に年代順に整理し、十個にも及ぶトランクに分類。平成六年（一九九四）十月六日、堯子夫人に見守られ、萩市の自宅で病没。八十三年間の多忙で激動の人生を終焉する。

（文・野口英男）



執筆原稿や資料を手作りの袋に入れて整理したトランクのの中身



映画「千羽鶴」の脚本表紙（右）と、その裏側に記された家族へのメッセージ（直筆）

諸井 條次 年譜

（提供・野口英男） ＊は、作品の掲載誌『劇生活文庫』を表す。

明治44（一九一）年 大正3（一九一四）年	三歳	7月9日、旧東京市本郷区湯島天神に生まれる。 父諸井六郎が北欧に領事として赴任中、同行の母が乗馬中の事故で死亡。幼少時は母方清水谷家（四国八幡浜）で育てられる。 東京の自宅に戻り、誠之小学校から開成中学校に進学するが、三年の時に肺結核に罹り中退。 8月、補充兵として八王子一七〇四部隊に召集。 10月、復員後、母方の叔父が経営していた萩市のクエン酸工場に身を寄せ、萩に定住。 萩保健所の女医、真子堯子と結婚。 「ジープの来る日」一幕。 「地鳴り」四幕。（雑誌『テアトロ』92号掲載） 演出家日笠世志久と出遭い、山口演劇研究所を設立。以後長い協力活動が続く。「つばくろ」六幕（雑誌『テアトロ』107、108号掲載） 「当世学校族」三幕（＊第1集・雑誌『新劇場』掲載）「いけにえ」「洋犬」「転進」「あいつ」「長靴物語」等一幕ものを執筆。 4月20日、日笠世志久と劇団「はぐるま座」を結成。座付き作家として劇団指導と創作活動に専念。「村の太鼓」一幕、「分水嶺」五幕七場（＊第3集） 「冬の旅」三幕（＊第4集、「鞍工兵」五幕（＊第5集）。「はだし」一幕および三幕。 構成劇「洪民村の啄木」、児童劇「ホルゲンの楯」「千鳥太鼓」三幕六場。はぐるま座614回上演。（日本演劇教育連盟『中学校学校劇脚本文庫』第三集掲載）「火の柱」三幕六場。（雑誌『テアトロ』157号掲載） シユプレヒコール「背中の弾痕を忘れぬために」「熱い雪」、児童劇「アラビアの火の鳥」「くらげのお使い」構成劇「千羽鶴」、映画シナリオ「千羽鶴」（共同映画社制作） 「天狗山口伝」 「晩春賦」、児童劇「あまんしゃぐめ物語」「プレーメンの音楽隊」等創作。山口・福岡県で巡演。	四七歳 四八歳
昭和32（一九五七）年	四六歳	《没後》 平成10（一九九八）年 平成11（一九九八）年 平成13（二〇〇〇）年	八三歳
昭和28（一九五三）年 昭和29（一九五四）年 昭和30（一九五五）年 昭和31（一九五六）年	四二歳 四三歳 四四歳 四五歳	昭和53（一九七八）年 昭和54（一九七九）年 昭和56（一九八二）年	六七歳 六八歳 七〇歳
昭和27（一九五二）年	四一歳	昭和44（一九六九）年 昭和45（一九七〇）年 昭和51（一九七六）年	五八歳 五九歳 六五歳
昭和26（一九五一）年	四〇歳	昭和42（一九六七）年	五六歳
昭和22（一九四七）年 昭和23（一九四八）年 昭和25（一九五〇）年	三六歳 三七歳 三九歳	昭和40（一九六五）年 昭和41（一九六六）年	五四歳 五五歳
昭和15（一九四〇）年 昭和20（一九四五）年	二九歳 三四歳	昭和38（一九六三）年 昭和39（一九六四）年	五二歳 五三歳
大正12（一九二三）年	一二歳	昭和37（一九六二）年	五一歳
昭和35（一九六〇）年 昭和36（一九六一）年	四九歳 五十歳		

構成劇「盲いた少女の生命のために」
児童劇「パンの天国」、人形劇「ひょうろく玉のごん六」
6月10日から7月12日、訪中日本作家団の一員として訪中。長周新聞に「訪中散記」（NO1、82号）を発表。
児童劇「少年ステータスとアメル先生」、「野火」（はぐるま座154回上演）、テレビドラマ「ひょうろく玉のごん六」（RKBテレビ放送）「青風」、人形劇「ほらふき地蔵」。7月、「西日本リリズム演劇会議」を日笠氏と結成。
「灼けた眼」、児童劇「おらんだ時計」、戯曲「異国」四幕（未発表）。

戯曲「天狗山騒動史」「冬の旅」（改訂）、シユプレヒコール「三池・俺たちは許せない」、「福田英子」五幕（未発表）、児童劇「ハーメルンの笛吹き」
人形劇「かばち村奇談」、「涛の跡」（未発表）。
児童劇「天狗の棒」、シユプレヒコール「俺は丸坊主はきらいだ」、「鳥獣合戦」（未発表）。

「野火」を作者の手で三幕五場の長編に改作し、「はぐるま座」が中国の要請で7月から11月に中国を巡演。無断の大改訂をめぐり、劇団と作家との関係が断絶。
劇団「はぐるま座」を退団。
史書「防長勤皇伝説注釈」、演劇創造理論の覚書執筆。
演出家日笠世志久と協力して「新劇人活動家友好訪中団」を組織し、団長として中国演劇人と再交流する。後に『中国の演劇・文革以後』（田畑書店）を発行。
歴史書『萩の乱と長州士族の維新』の研究と執筆。
12月、日笠世志久らと、NPO日中演劇交流話劇人社を東京に設立。「中国現代戯曲集」の編集・発行。
人形劇「てんぐの棒」一幕、「夢見小僧勘太」（未発表）
長年の執筆活動から資料の整理に重点を変え、各年度の原稿や記録類を10に及ぶトランクに分類・整理。
長年の病氣療養が続いた後、堯子夫人に見守られて萩市の自宅で、10月6日、病没。

『戦争と平和』戯曲全集第6巻（日本図書センター）
『萩の乱と長州士族の維新』（同成社）
『鞍工兵』（共著 晩成書房）